

## 資料

## 家政系の大学・短大に対する高校生の意識

安藤 文子, 石原 久代\*, 白石 孝子\*\*

(愛知女子短期大学, \*名古屋女子大学, \*\*名古屋女子文化短期大学)

平成3年7月17日受理

## High School Student's Attitudes toward the College of Home Economics

Fumiko ANDO, Hisayo ISHIHARA\* and Takako SHIRAIKI\*\*

*Aichi Women's Junior College, Nissin-cho, Aichi 470-01**\* Nagoya Women's University, Nagoya 467**\*\* Nagoya Feminine Culture Junior College, Nagoya 461*

**Keywords:** high school students 高校生, department of home economics 家政学科, name changing 名称変更.

## 1. 緒 言

近年、多くの家政系大学および短大において学科の名称変更が実施されている。これは、国際化・情報化の進展、女性の社会進出や、それに伴う生活意識・価値観の多様化、さらに家族関係の変化など、様々な面での急速な社会変化に適応しうる教育内容への変更を目的としたものであると認識している。

このような状況の中で、最も大学への関心をもっていると考えられる高校3年生を対象に、家政系大学や短大に対して抱いているイメージ、教育内容についての認識度、さらに家政学科という名称と生活学科などの新名称とのイメージの相違等について把握することとは、今後の方向を検討する上で意義あることと考え調査を実施した。

また、これらの意識が、関東地域と中部地域という地域差、男女差、普通科・家政科などによって異なるかどうかを検討した。

## 2. 調査方法

実施時期：1990年9月。

調査対象：関東地域のべ6校、中部地域のべ12校の公立高校3年生1,796名。中部地域の高校のうち4校は郡部にあり、その他の高校はすべて都市部にある。有効回答者数は1,652名(92%)で、内訳は図1に示すところである。

調査方法：集合調査法。

## 3. 結果および考察

## (1) 高校卒業後の希望進路

希望進路による回答内容の差を検討するため、卒業後の進路について設問した。結果は図2に示すようである。

中部地域の家政科（以後、中部家政とする。関東地域についても同様）において進学希望者が34.1%と少ないほか、他のコースでは、地域差、コース差は見られず女子では65%前後、男子ではそれよりやや多い結果となった。これは、平成2年の文部省資料による高等教育への進学率53.7%と比較し、中部家政以外はかなり上回っている割合であり、進学に対し強い意識を持つ集団と判断した。

また、希望進路についてみると、家政系大学・短大への希望は、家政科の生徒に多く、普通科女子では約10%程度見られる。

## (2) 家政学科につづく名称として好ましい学科名

家政系の学科として、どのような名称が好ましいと思うかについて図3に示すような名称をあげ、2つ回答させたが、生活学科、生活教養学科、生活文化学科などが高い値を示している。これに対し、情報、環境、科学、造形など、やや専門的或いは具体的な名称が加えられたものは低い値を示している。

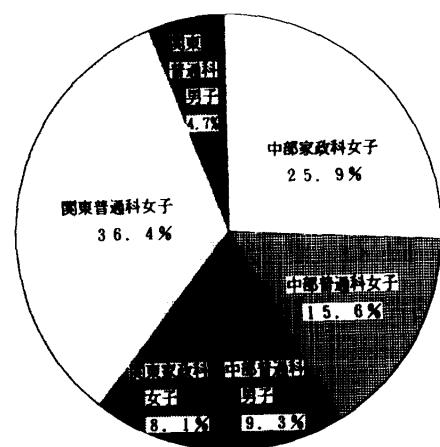


図 1. アンケート回答者内訳

## (3) 家政学科と生活学科のイメージ

新しい名称の一例として生活学科をとりあげ、家政学科および生活学科に対してどのようなイメージをもっているかについて SD 法の 5 段階評定で調べたものを図 4 に示す。イメージ用語については、いわゆる評価、力量、活動の因子を含む形容詞対の中から、学科のイメージを測定するのに適していると思われるものを選出した。なお、実際の評価に際しては、偏りがないように、両極性評定尺度の左右の位置を置き換えて調査した。

全体的には図 4-1 に示すように、家政学科は生活学科より「やわらかい」「好きな」「素朴な」「あたたかい」と評価され、逆に生活学科では「知性的な」イメージにおいて評価が高い。

これを普通科と家政科の女子で比較すると、家政学科

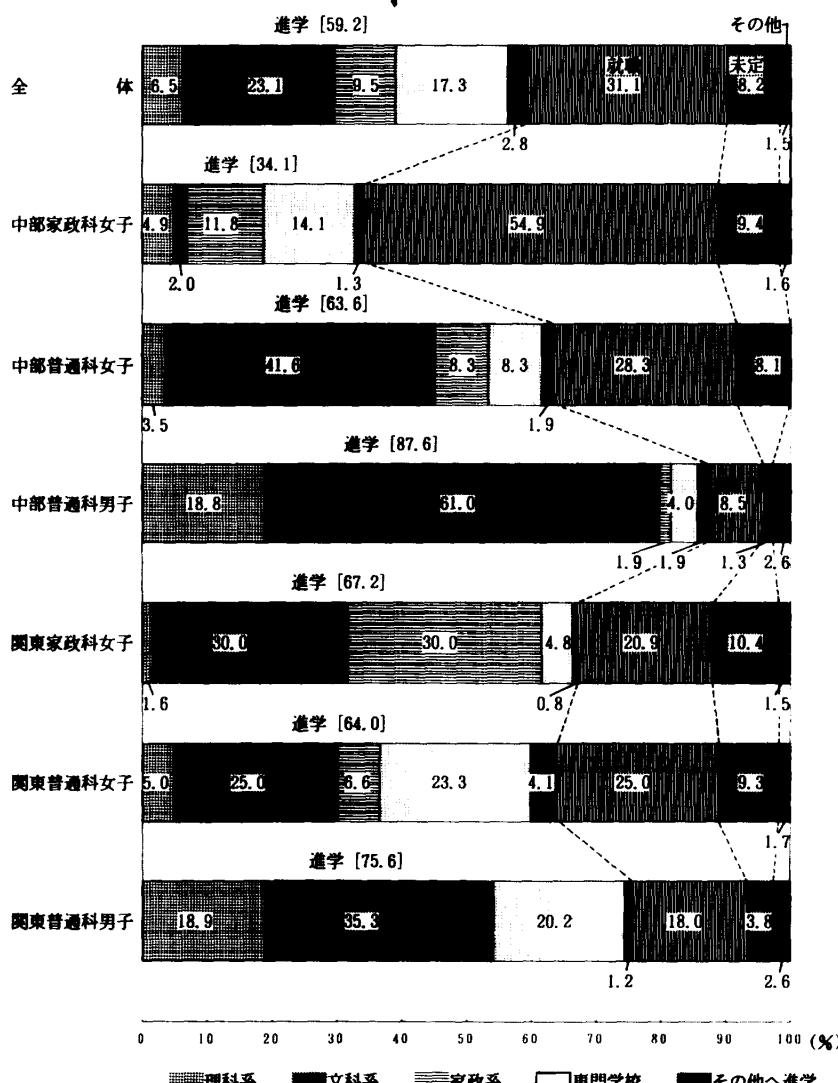


図 2. 卒業後の進路

## 家政系の大学・短大に対する高校生の意識

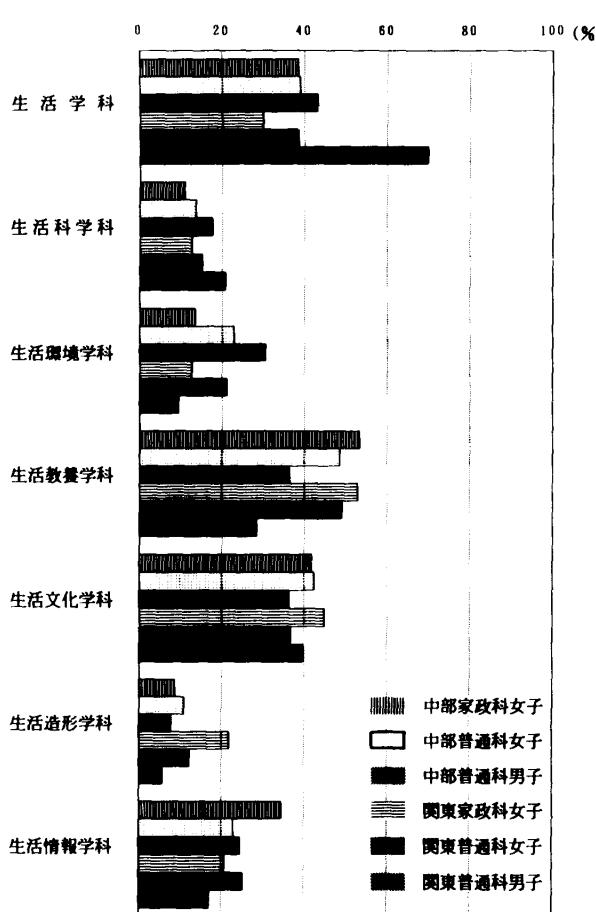


図3. 好ましいと思われる学科名

に対しては全般的に家政科の生徒に好意的評価がみられ、特に「明るい」「好きな」「魅力のある」において著しい（図4-2）。

これは、自ら学んでいる分野に対して肯定的にとらえようとする意識が強く働くことに加え、実際にある程度家政学の内容を認識し、時代に相応した家政学の将来性に対し明るい見通しを持った回答結果と考える。

また、普通科男子については全般的に平均的回答に留まった。これは女子と比較し「家政」に対するイメージが明確ではない結果と考えられる。

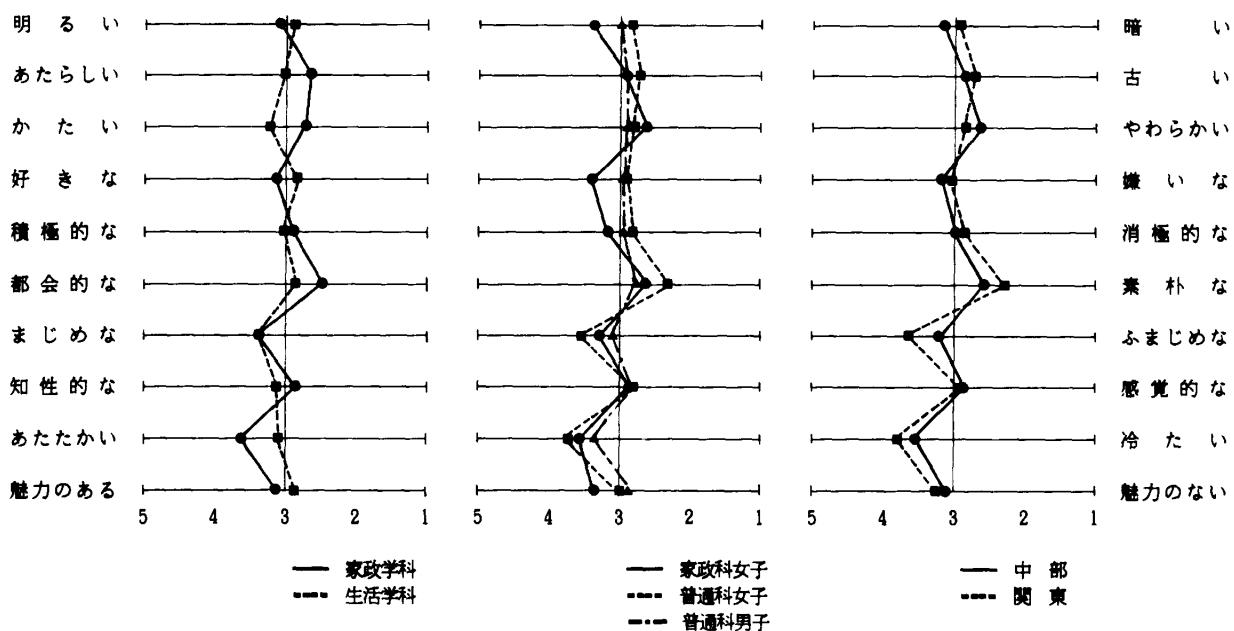
関東と中部の地域差では、家政学科に対して、中部より関東で「まじめな」「あたたかい」評価が高く、とくに前者の差は著しい（図4-3）。逆に、中部では「明るい」評価が高く、地域による差が比較的明確にみられる。また、生活学科に対する評価は、前述の項目も含め差が認められず、平均的回答に留まっており、明確なイメージがつかめていない状況が考えられる。

## (4) 家政学科及び生活学科の分野

名称変更された学科名の一例として、生活学科を選び家政学科および生活学科において実際にあると思う分野を選択した結果が図5である。

家政学科において認識度が高いのは、食物、被服、保育、次いで家庭経営、住居である。生活学科では、住居、環境、家庭経営、健康が高い値を示している。

両学科を比較すると、生活学科で減少したのは食物、



4-1 家政学科・生活学科のイメージ

4-2 家政学科のイメージ (1)

4-3 家政学科のイメージ (2)

図4. 各学科に対するイメージ

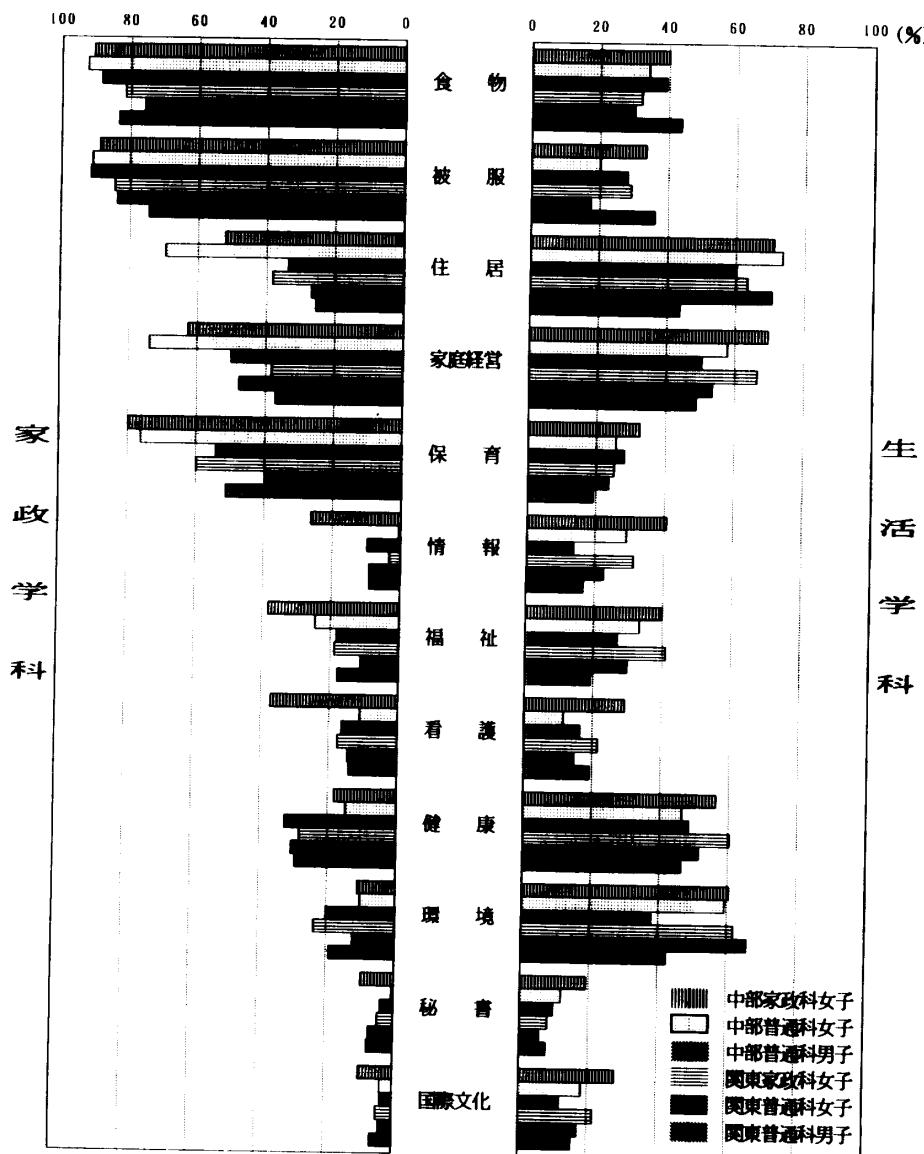


図 5. 各学科の分野

被服、保育で、逆に増加したのは情報、健康、環境、国際文化があげられる。共通して高いのは、住居、家庭経営となっている。

衣、食関係の分野が生活学科というイメージとは結びつかないこと、家政学科での家庭看護や福祉関係科目、情報関係科目についての認識が低いことがあげられる。

また、生活学科については、まだ明確なイメージ、認識が持たれていないといえる。これは、前項(3)においても共通して言えることであるが家政学科よりも、生活学科のほうが生活範囲を広く理論的にとらえようとする傾向が見られる。

##### (5) 家政系大学・短大へ進学することの長所

図6に示すように、家政系の大学・短大へ進学するこ

との長所について調査した結果、「家庭生活で役立つ知識・技術の修得」が著しく高い割合を占めるが、関東家政のみ、やや低い値に留まっている。これは、「結婚時に相手によい印象を与える」「礼儀作法が身につく」の項目についても同様の傾向を示しており、いわゆる“花嫁修業的”な従来の家政学科のイメージに対し否定的姿勢がみられ、逆に、「専門的な知識・教養が得られる」「専門的な職業につける」のように専門性への評価は他の集団より著しく高い結果となっている。

また、専門性への評価を全体的にみた場合、男子より女子に高い傾向がみられ、逆に、男子においては「結婚時に相手によい印象を与える」や「礼儀作法が身につく」のように女性に良妻としての条件を尊重する評価が

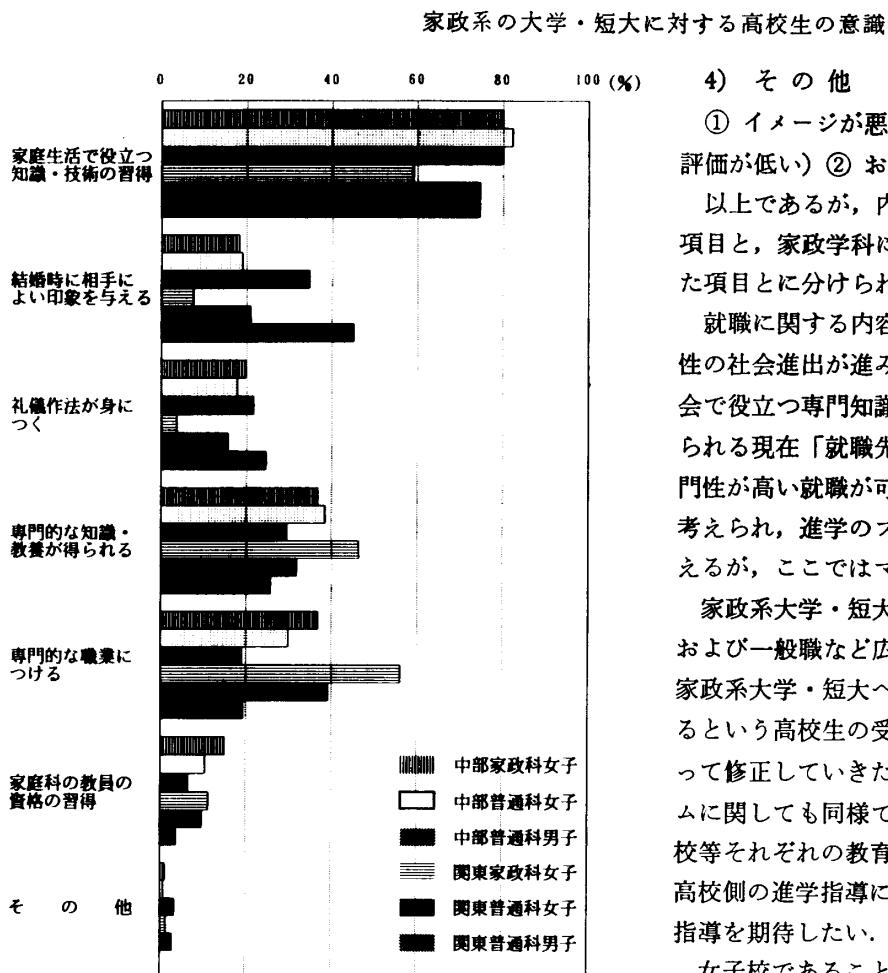


図 6. 家政系の大学・短大へ進学することの長所

高い傾向がみられ、女子との意識の差において、興味深い結果を示している。

女性の意識において地域差が認められたことについては、地域による社会規範の制約の多少が今回の結果に表れていると考えられる。

#### (6) 家政系大学・短大へ進学することの短所

自由記入の形式で記入された結果について多い順にあげると次のようになる。

##### 1) 就職に関すること

① 就職先が限定される ② (条件の) 良い就職ができない ③ 学んだことを就職に生かせない

##### 2) カリキュラムに関すること

① 一般教養が学べず、専門的な限られた内容しか学べない ② 学ぶ内容が不明で、将来どう生かされるかがわからない ③ 誰にでもできることを、特に大学で学ぶ必要がない

##### 3) 女子大が多いこと

① 女性ばかりの環境では、発想が貧困になる ② 女性であることを押しつけられる気がする

#### 4) その他

- ① イメージが悪い(暗い、固い、古い、つまらない、評価が低い)
- ② お金がかかる

以上であるが、内容的に誤解されていると考えられる項目と、家政学科に対するイメージ的な短所を取り上げた項目とに分けられる。

就職に関する内容は、前者に該当すると考えるが、女性の社会進出が進み、高校卒業後の進学理由は、将来社会で役立つ専門知識及び技術、資格の習得にあると考えられる現在「就職先が限定される」ことは、逆に、「専門性が高い就職が可能である」ということではないかと考えられ、進学のプラス要素として考慮される項目と考えるが、ここではマイナス要素としてあげられている。

家政系大学・短大卒業後の就職先については、専門職および一般職など広い範囲にわたるのが現状であるが、家政系大学・短大への進学は多方面への就職に不利であるという高校生の受け止め方は、ぜひ大学側の努力によって修正していきたい項目である。これは、カリキュラムに関しても同様である。同時に、大学・短大・専門学校等それぞれの教育内容の特徴・相違などについては、高校側の進学指導においても正しい認識がもてるような指導を期待したい。

女子校であることについては、共学への方向をとる学校もあるが、反面、女子大であることにより女性が男性に頼らずに、自主的に様々な行動をすることにより組織力や統率力を養う機会に恵まれるという長所も当然存在する訳である。しかし、現状ではその点に対する評価は、低いと考える。今後女子大として存続していくのであれば、前述のような点に対して大学側も学生もしっかりとした認識をもって女子校の良さを生かすべく活動し運営していくことが大切であると思われる。

その他の項目のイメージについては、現在多くの家政系大学・短大において名称変更をはじめ様々な形でのイメージアップが図られ、その効果が現れつつある状況であると考える。

#### 4. 結論

家政系大学・短大および新名称の学科に対する高校生の意識・認識について調査した結果、次のような結論を得た。

(1) 新しい名称として好ましいイメージを持つものとしては、生活学科、生活教養学科、生活文化学科等があげられた。

(2) 高校生の認識として、家政学科は食物、被服、保

## 日本家政学会誌 Vol. 43 No. 6 (1992)

育等の分野について学ぶ、いわゆる良妻賢母育成機関であると考えられ、「やわらかい」「好きな」「素朴な」「あたたかい」イメージが生活学科より高いのに対して、生活学科では、家政学科ほど明確なイメージは持たないが、実技・実習を離れ、住居、環境、家庭経営など生活をより広く理論的にとらえた分野と感じ「知性的な」イメージが高い。

(3) 家政系大学・短大へ進学する長所として、男子は、結婚生活の中で生かされることへの評価が高い傾向がみられるのに対し、女子では就職時に生かされる専門性への評価が高く、男女差が認められた。この傾向は中部女子より関東女子により認められ、女性の意識の点で地域差がみられる。

(4) 短所として、就職に関する不利益が多くあげられ、カリキュラムについても誤った認識が強く、大学サイド

からの的確なイメージづくりに向けて、努力の必要性を痛感する結果となった。

本調査結果は、平成3年度日本家政学会第43回大会において発表した。

最後に、本調査に際し関東および中部地域の、多くの高校の先生方および高校生の皆様にご協力いただきましたことを、心から感謝致します。

## 参考文献

- 1) 私立協: 家政系教員研修会資料 (1990)
- 2) 文部省高等教育局: 大学審議会ニュース, No. 7 (1990)
- 3) 林 淳三: 家政誌, 42, 89 (1991)
- 4) 中林 浩, 他: 家政誌, 42, 187 (1991)